

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

語  
る  
大  
拙

鈴木大拙講演集2

SAM]  
Shos  
insui.com

書  
肆  
心  
水

目次

附録	也風流庵自伝
私の履歴書	9
II	I
佛教と世界文化	信仰と学問
佛教とシナ民族性	宗教について
日本の哲学者への遺言	『臨済錄』講話
キリスト教と仏教	大智と大悲
286	115
260	72
	27
	50
	185
	212
	241

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

発表年一覧

也風流庵自伝……………一九六一年

I  
信仰と学問……………一九三四年  
宗教について……………一九三七年

『臨済録』講話……………一九四七年  
大智と大悲……………一九五三年

II

佛教と世界文化……………一九三三年

佛教とシナ民族性……………一九三五年

日本の哲学者への遺言……………一九六一年

キリスト教と仏教……………一九六四年

附録

私の履歴書……………一九六一年

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

語  
る  
大  
拙

鈴木大拙講演集2

太  
智  
と  
大  
悲

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 凡例

- 一、底本には岩波書店版鈴木大拙全集（増補新版）を使用した。
- 一、収録の各文章は各パートごとに発表された順で掲載した。
- 一、本書では原則として新仮名遣いで表記した。漢字の字体は底本のとおりである。
- 一、読み仮名ルビは底本にあるものを取捨した。新たに追加したものもある。
- 一、現今一般に平仮名表記をする場合が多いと考えられるものは平仮名で表記した（併し＝しかし、亦＝また、茲＝ここ、など）。
- 一、「個々」「一一」などは、「個々」「一々」のように「々」を用いて表記した。また、二の字点は「々」に置き換えて表記し、一の字点、くの字点は文字に置き換えて表記した。
- 一、「」でくくった註は本書刊行所によるものである。併つて底本における「」は「」に置き換えた。
- 一、講演記録ではないものは附録とした。

## 也風流庵自伝

自叙伝みたいなものを話しせいという御注文ですが、わしは一体そういうことが嫌いなもので、自叙伝だの思い出なんちゅうことは話さないということにしておりますが……。殊に、それを秩序づけてお話するというようなことは、あまりよくしないところです。ところがですな、人間は時間に生きておるとすれば、生きておるそのことが時間であるとすれば、自然、過去・現在・未来が出来ると、そうすりや、過去のこともしたがつて話の中に出て来るのが普通だと思います。それでもまあそういう調子での話で、秩序のたつた過去がどうのこうのということでなしに、ただいまおたずねになるまま思い出を申します。

わしは、加賀の金沢に生れたので、殿様は百万石で、徳川の幕府下でもすこぶるその重きをなしておったのですね。それで殿様は幕府ににらまれるということを好まないので、なるべく諂ひうぶか……といふても今の人にはわからんかも知れんが、かくれるといふなるべく自分をかくすというふうで、文化事業に熱心になって、政治というようなことには関係しないというので、金沢は自然にその文化的に開けたところです。それからまた、どういう具合ですか、蓮如上人時代、加賀の方へずっとこの真宗の開拓が盛んに進行したですね。それ前にや、まあ、越前に永平寺があり、能登に総持寺があるというので、曹洞宗の方が石川県でつま

り金沢方面では有力であったのが、蓮如上人以来、真宗の進出が盛んになって、そして真宗のお寺が北陸に盛んに行われるようになつたですな、まあ、東西両本願寺の立派な別院があるし……。そんなわけで、北陸の人は自然に宗教心があるというか……自然に宗教心があるっていうわけには行かないでしようが。それから北陸の人は割合にこの鈍重ということをいいます、このむしろ重い、そして物事をはきはきさつさとやれないような傾きがある。そのかわり、一遍始めたことは、しまいまで続けるとか、倦まんとかいうような傾向があつたらしいのですね。そういうふうに、まあいくらか、日本でも加賀の特徴は知られていたわけでしよう。わしの家は禅宗で、殊に臨済宗であったのですが、加賀は臨済宗はまれで少なく、曹洞宗が多い、そして真宗が強かつたわけですね。それで親は……、父は医者で儒者であったが、母は別に特別の真宗信者でもなし禅宗信者でもないが、仏教に心がけを持つておつたということは、この地方の自然の環境・社会的環境から、そういうことになつたんだろうと思ひますが……。早く父が死んだものだから、よくその生れた家の仏壇を……仏壇は北国じや一軒一軒に持つておるですね……、まあ、わしらの方の仏壇というのは極めて簡単なもので、真宗の仏壇になるちゅうときらきらしたものであつたが、わしらの方の仏壇は白木で出来ておつたですね、そして簡単なものであつたが、父親は儒者主義であつたか、戒名を書くかわりに、その人の名を書いて、何とか靈位ということを書いておつたかなあ、それは忘れてしまつたが、何か儒者風の名で、今でもこっちやに、どつかここにあるだろうと思うが、そういうことになつておつたですね。けれどもそれで仏教の方を捨てたというわけじやあ勿論ないが、まあそういうふうであつたと。

それから加賀にはこの秘事法門ちゅうものがなかなか行われておつたらしいんだな。私は、ありやあまあ九つか十かでしょうね、そのころで……父が亡くなつたのは六つのころだなあ……、それで何も母親の真宗的に行動されたことは覚えていないですね。けれども、この秘事法門ちゅう方の仲間に母は入つていたらし

い氣がするんだ。それで、秘事法門の或る意味でいう洗礼を受けたということにもなるですかね。それを今でも覚えておるが、その洗礼というやつがですな、そのまあ、段々年を取つてから宗教的な行動や宗教的心理というものを考えてみるちゅうと、秘事法門のやり方というものが、やはり一般の宗教的心理で解釈できるようなことになるですね。それで親鸞聖人がこの秘事法門の傾向を持った自分の子供を義絶したといふこと、破門したというようなところにまあ真宗の特色があるんだが、真宗にも自然やはり秘事法門へ出るべきようなものを持っていたに相違ないと、わしはまあ思うですがね。それは大分教理的な問題になるし、また他日そういうことに触れてもよいが、今日はそいつはよして、そういうことから、自然にこの母の感化を受けたというか、まあそういうことになつたわけでしょうね。

父が死んだその次の年（明治九年）に、わしのちょっと上の兄が死んでおるですね。二年続いて、自分の夫が亡くなり、自分の子供の一人が亡くなるということは、母親にとつては大変な経験になつたに相違ないと思う。それで、それから目が悪くなつて、越中の黒谷の何でしたかなあ、そこの大不動さん（富山県中新川郡上市町の大岩不動）の滝に打たれに行つたということがありますな……病院に入ったのは勿論だが。そういうようなことで、宗教的な氣分が十分に母親に動いておつたもんだろうと思う。そういう感化を受けたかどうか知らんが、自然、わしも宗教方面に関心を持つことになつたわけですね。それからそのころ、わしや本多（加賀藩の家老）の家中ですが、その本多の若主人というのが京都へ出て、大徳寺のあのころの管長さんは誰だったか知らんが、その人のもとで禅を修行せられたということをよく聞いておりましたが、そういうことでこの、真宗ということだの禅宗ということだのが家の中に何かにつけ話が出たが、話が出るというよりも、そういう雰囲気があつたといういいわけですね。別に母が宗教の話をしたでもなけれど、どうしたこうしたということはありませんけれども、一種やっぱりこの、毎月お経を読んでもらうとか、毎朝この

お燈明を上げるというようなことですね……。わしのところでは、別にお経を読んだということは聞かなかつた、また見なかつたが、まあ毎日毎朝仏様に参るちゅうことはやつておつたですね。そういうことがこの、無言の間に子供の上に及ぼす感化があるものと見えるですね。それで、カトリックの今のやり方を見つても、教育に力をつくすですね。そして、その教育に力をつくすにも、この女子教育に子供の時から力をつくすというようなことも、自然そういう点から出たのかも知れんと思います。

こういうことをくわしく話しく話しく話すちゅうと何だが、専門学校ちゅう学校へ……わしや実際その学校を正式に卒業したのは一つもないんです、小学校もいい加減で中学校へ移つたですね……、石川専門学校ちゅうのは、つまり今の中学校みたいなもんですね、その専門学校の附属中学校というのへ、小学校を卒業せずに入つて、入つて何年か経つて文部省の教育新学制が発布せられて……、そして森有礼文部大臣ちゅうのが、なかなかこれやり手の人で、その人が高等中学校を……あのころは高等学校といわずと高等中学校……、全國に何箇所かこしらえた、あれは五つか六つこしらえたですね。そしてまあ金沢は第四高等中学校ちゅうことになつてゐる。その第四高等中学校へ編入せられた方ですね。そこでまあ中学校における時にや、学生がいろんなことを話したりするが、その時にこの藤岡作太郎ちゅうようなんだの、山本良吉なんてな、ありやもと金田といつた、金田良吉とか……西田〔幾多郎〕はあの時にはまだ関係していなかつたようだな……、そのほか文学をやる人間がその、『明治余滴』というのを、そういう雑誌を、まあ一箇月に一遍ちゅうわけじやないが、出来たら持つて寄るというわけですね、それをやつたが、みな漢文で書いたものですね、そのころは。今でもありやあ、わしの知つた男にやつてしまつたが、あの人が持つておるかも知れん、もう持つておらんか知らんが、まあそんな雑誌を出したりなあ。こいつがなかなか経験になるものでしてね。小説、そんなものじやないんだ、たとえば楠正成論とかね、それから、どこそこへ遊山に行つたとかな、そんなようなこと

だ。そんなその小説なんてものは、まあこりや道楽者のやることになつておつて、吾々の眼中になかつた方だ。だから漢文のむつかしいものを書いたものです。歴史の議論をするなんてことはまあ面白い。それからよいよこの高等学校になつた時に、西田君などが来たんだな。西田君は専門学校へ、もと入つていなかつた、あれは師範学校かな、師範学校から移つて來たかな。西田幾多郎ね。

そうだね、あのころは専門学校……。武部直松ちゅう人があつて、その人がまあ、専門学校を何か一つ編成したようだつたな。その時に東京の大学を出た先生を三人か四人か頼んで來た。そしてそれが一年か二年か経つて高等中学校になつたんだろう。それからその時に來た先生でその、北条時敬(ときゆき)っていう人がおつたが、その人は数学の先生で、広島の大学の、ありやあ師範大学（広島高等師範学校）というものですかな、後にあすこの学長になつたり、それから東北大の総長になつて、そして最後に学習院に來て、学習院でやめて、亡くなられた人だな。この北条時敬というのはなかなかの教育家でしたな。で、その人の数学というものが、わしらが初め習つた時の数学と大分違うので、その時に初めて数学つていうものに対して、いかくらか興味を持つようになつたのが、まあ北条先生のおかげだな。それから、その時に西田君などは数学で一家をなすようなことをよく話しどたようなことがあるが、哲学者になつてしまつたですね。それから、北条先生は東京におられた時、この円覚寺の今北洪川和尚について坐禅をした人ですね。そういう関係から、北条先生が金沢に来られて、そうして禅……禅を大いに鼓吹せられたのですな。数学の先生だったが、学生を集めて禅の話をして、それから越中の、そのころ国泰寺に……荻野独園和尚の弟子であった、あれは何とかいう人だ……雪門(せつもん)だ、雪の門と書いた雪門和尚つていう人がおつて、その人が金沢に来て、毎月一回か禅宗の話をやられたようであつたな。そんなことがあつて、坐禅をしよう、坐禅というものはどういうものかということを聞きに、国泰寺へ行つたこともあるですがね。越中の国泰寺というのは高岡から少し離れたと

ころであるが、俱利伽羅峠を越えて高岡へ行つて、高岡からさきは歩いたように思つておるな。そしてその国泰寺で雪門和尚に会つて禪の話を聞いたのが、まあ禪に関係の出来た初めですね。もつとも、まだ初めがあるんですけどね、まあそいつは略してしまつて。そういうことがまあ禪に関する因縁ですね。

そういうことから東京へ出て来てですね、明治二十四年に出で来て、それからすぐ、この早川千吉郎といふのはその、三井だつたかな、三井のまあその頭取になつた有名な人の一人ですね、この人もやっぱり坐禪をした人ですが、その人の紹介で鎌倉の今北洪川和尚のところへ來たわけですな。それから東京から鎌倉へ時々通うたわけなんですね。そしたらその次の年（明治二十五年）に洪川老師は遷化せられたなあ、ありやあ一月の十六日だと思っておるが。この今北洪川和尚といふのは、こりやなかなか偉い人でしたなあ、近世の禪宗の方から見たら、まあ大宗匠でしょうね。で、この人、まあわしらはその時そういうことは何も知らんのだから、ただ禪宗の坊さんちゅうので、初めて参禪するようになつたんだが、その洪川老師といふ人の禪宗の提唱などといふものは、今に記憶に残つておるが、そのころは何もわからずにおつたが。その風采つていうかですね、まあからだが大きい人で、中風でもあつたか、三拜などせられる時にや、足がうまく動かないでの、畳の上でも、ガタンガタンと音のするぐらいに膝をつかれた覚えがあるですね。如何にも素朴な禪宗坊さんで、今日の禪宗坊さんから見るちゅうとまあ、雲泥の違いですね。あれで、わしが二十一歳となるから、今から見るちゅうと、ほとんど七十年ほど前になりますね。七十年の間に大分……大分じやない、まあ大違ひに違つたわけですね。明治二十四年ころの円覚寺といふと……、二十一歳だとするちゅうと何も知らんのだからな、なに、二十一だちゅうとなかなか利口な人も多いが、わしらは田舎から出て来て、何もわからないので、自分のことだけで色々なことは知らないんだ。まあそれから、そのころ來た人の中でも有名な人は、今いう北条時敬という人、この人は教育家として何だつたし、それから早川千吉郎といふのもま

あ、今の三井の頭取か親分をしておった方ですね。それから、秋月佐都夫というのは、この人はベルジュー  
ムの大使になつて、そしてやめた人。それから秋月佐都夫さんの弟の鈴木左馬也といいうのがあるですね、こ  
れもまあどつかの頭取になつたかなあ。川村善益つていいう人、こりや大審院の判事になつた人と思うが、ま  
あ裁判官としては有名人ですね。それからまだ何かあつたかな、鳥尾得庵か、鳥尾得庵といいうのなどがいた  
な。この鳥尾得庵といいう人はなかなか覇氣のある人ですね、偉かつたが、それよりもまあ山岡鉄舟の方が人  
間は円満であるし、修養もなかなか出来たちゅう話ですね。あの人は三島（龍沢寺）へ参禅したかな、馬に  
乗つて東京から出かけられた、あの時は汽車なんてものはありやしないんだからね。それからこの鎌倉の円  
覚寺へも来て、洪川老師にも会われたが、参禅は実際せられたかどうかは知りませんが、まあそういう人た  
ちですね。その時にまたあの元良勇次郎といいう人が、東京帝国大学の心理学の先生になつておつたですね、  
その人が参禅をやつて、そうして参禅の、ありやあ今でもまああるだろ、参禅日記を書いて、『哲学雑誌』  
かな『心理学雑誌』かな、あのころ帝国大学で出た雑誌がありますがね、それに何か書いたんだな、経験  
を。そしてそれが一時大変にやかましかつたな。参禅する時にやまあ、参禅のこの室内の話といいうものは、  
ほかへもれないようにしておくのがまあ、従来の慣習ですね。まあその方がいいでしよう。秘密にせんなら  
んというわけよりも、話をしても何にもならず、また話しするちゅうというと、かえつて当人の進歩を妨げ  
るというようなこともあるですね。そういう点からまあ秘密にしておくんじゃないが、だまつておる方がい  
いということになつておるが、それを元良さん、どうかしたといいうのでやかましかつたことがあるなあ。

そうか、夏目漱石は、ありやあずうつと後だ。夏目漱石は、洪川老師が亡くなられて、そうして釈宗演和尚といいうのがその後へ出て来られたですね。夏目漱石が学校を卒業したのは、ありやあいつか知らんけど、  
あの人は英文科を出ておるですね。その時に、円覚寺の塔頭の帰源院といいうところ、まあ今もありますが、

その帰源院へ来て参禅をしておったですね。そのころ、わしも帰源院に厄介になつておったのです。そのころ（明治二十六年）、釈宗演和尚が、シカゴの博覧会、万国博覧会に附属して宗教会議というものを開いた、そこへ招待せられて、日本から三人かの坊さんと、それから神道の人が一人行つたのかな、柴田何とかいう人で。その時に釈宗演和尚が、自分じやまあ読めないが、何かしゃべらんならんので、まあ五分か十分ぐらいいしゃべるのを英文でやらんならんというので、それをわしが翻訳をしたことがあるが、それでその翻訳を夏目さんに見てもらつたんだな、そういうことがある。その時の交渉だね、それだけだな、そのほかは何も夏目漱石さんとのゆきかいはなしだ。

この宗演禪師つちゅうのがなかなかこの偉い人ですね、これは、今北洪川和尚が、京都の妙心の越渓和尚というのから、越渓和尚のもとで小僧になつておられた宗演禪師を貰つて来て、自分の弟子にした方ですね。よほど利発で俊発な人で、室内つて、まあ参禅の方面でも、修行がなかなか進んだという話ですね。それでも、何でも大変可愛がられたという話だが、その宗演禪師が、僧堂の修行を済まして、そうして慶應義塾へ行つてですね、福沢諭吉先生のもとで勉強をして、それからまたセイロンへ出かけたということですね。まあそのころの禅宗の坊さんとしては、もう破天荒な行動ですね。禅宗の修行を一通り終えるとなれば、大抵まあ大和尚とか大禪師というものか、まあ威張り散らしておるわけだが、そうでなしに俗の学校へ入つて、そしてインドまでも、まあセイロンまでも行つて修行せられた。そのころの宗演老師の『西遊日記』ちゅうものもありますがな。その時がもう円覚寺の一一番盛んであつた時で、洪川老師以来でしょう。洪川老師があの今の禅堂を建てられたんですが、洪川老師がおられても、坊さんは来たかも知れんけど、居士はもう余計は来なかつただろ、汽車の関係とか何とか、そのころ何も無かつたのだから。私はアメリカへ行くまでちょっと五年ほどの間、まあ僧堂に関係しておつたですね。その間のその、坊さんや居士の宗演

老師へ参禅したものは、大変な数でしょう。今でもあの記録が残つておるかも知れんが、まあ大変な坊さんがおつたし、居士も色々だつたが、しかし僧堂の生活というものは、甚だみじめなものですね、食物なんことは、話にならんくらいなもので、あれでよく生きていられると思うようなものでしたな。それで、坊さんは外へ呼ばれて御飯食べる時は、やたらに食べたもので、それでお腹をこわしたなんて話がいくらもあるし、それから、ああいうところで無理をやつたために、いよいよ世間へ出ても、長生きをしなかつたというようなこともあるでしょう。しかし二十七、八ぐらいの時は少し無理したつて何でもなかろうけれども……、まあ大体そですな。

それから、アメリカへ……。今のその宗教会議があつたでしょう、それでまあ宗演老師の演説の草稿を訳したと。そしてその、向うのドクトル・ポール・ケーラスというのが、『仏陀の福音』という本を書いたのですね、『ガスペル・オブ・ブッダ』という。その『ガスペル・オブ・ブッダ』というものをケーラスが書いたのは、釈宗演和尚などと話をして、それから一つのインスピレーションを得たというようなわけでしょう。それで『ガスペル・オブ・ブッダ』を書いて、それをわしが日本文に訳して、それが『仏陀の福音』という本になつたんですね。ケーラスという人はいくらでも本を書いておるが、そのうちで今でもよく売れるのは、この『ガスペル・オブ・ブッダ』ですね。そして、ケーラスが、老子の『道徳経』という本、老子ちゅうのは道教の老・莊の老子ですね、それを英文に訳すというので、アメリカにおつてちょっと手伝いが得られんので、それをよく読んでくれる者がないかということで、人を求めておつたんですね。釈宗演和尚が、それじや、わしが行つたらどうだというようなことになつて、その関係でアメリカへ行つたんです。アメリカへ行きや、またセイロンへ行く機会もあるだろうというので、アメリカへ行つたわけですね。それも、今から考えてみりや、妙なもんさね。そういうわけであま、アメリカへ行つたわけですね。そしてア

メリカへ行つてから……、セイロンどころじゃない、貧乏で金はないから、その会社へ附属して、編集局でまあいろんな手伝いをしたわけですね。それが一年二年と延びて、十年あまりになつたわけですね。それからヨーロッパを回つて、一年ばかり経つて日本へ帰つたです。

アメリカへ仏教というものを紹介した、アメリカ人が仏教に対しても関心を持つようになつたのは、こりや人が知つとらんといふとかんが、わしの見るところでは、この宗教会議があつてからですね。その点じや、夏目漱石さんもいくらか関係しておるが、今のその演説の草稿を直してくれただけでも違うですね。この万国宗教会議ちゅうものをやつた時に、釈宗演和尚が、他の仏教の人、土岐（法龍）という人、真言宗の管長になられた人だが、その人らと一緒に行つたですね。そして宗演和尚がケーラスやヘグラーのおるシカゴの附近のラサルというところへ呼ばれて、そこで一週間ばかり寝起きをして、そしていろんな仏教の話を取り交わした。それが因縁になつて、ケーラスが本を書くとね。ケーラスが本を書いただけじゃなくして、そのころまたこの、ヴィヴェーカーナンダという有名なインドのフィロソフィストの代表者が来ておつたですね。そいつがまあ英語が上手で、帰りに、色々そのアメリカ中をしゃべり歩いたですね。それで、東洋に関する関心がアメリカ人の間に涌いて来て、それに附属して仏教に対する興味もアメリカ人が持つようになつて来たわけですな。しかし一般にいうと、キリスト教の国だから仏教などに関心はないでしょう。

この禅というものに対して、近ごろまあアメリカの人が評判をするとか、ヨーロッパでも関心を持つておるというようなことになりだしたのはですね、ヨーロッパやアメリカから帰つて来て、わしが英語で禅のことを書き出したという、そいつがまあ端緒になるでしょうね。それまでに禅のことをいう人は、禅としていう人は、ほとんどなかつたろう。岡倉天心という、あの人は偉い人でしたね。あの人人が、絵の方から、絵の方とお茶の方だなあ、『ザ・ブック・オブ・ティ』……『茶の本』というのがあるが、あの本に禅の

ことを、お茶と禪は関係があるということをいった。それが初めでしょうね、禪ということがヨーロッパやアメリカの方に知れるようになつたのは。しかし、英語で禪というものを専門に書いたのは、まあ一番最初に書いたのは、わしだろう。それから、それと前後して後に書いたのは、大峠おおはざまという人がありますね、大峠竹堂という人がその、ドイツ語で『生ける仏教』というのを書いた本があるですね、『デア・レーベンディゲ・ブッディスムス・イン・ヤパン』。そいつを書いたのと、忽滑谷快天ぬかりやという曹洞宗のあれが学者でしたね……あの人があもつと生きておるちゅうと面白いんだつたが、死んでしまつたな……、あの人気が書いた、その『ザ・レリジョン・オブ・ザ・サムライ』……『さむらひの宗教』、それに禪のことを書いたんだが、しかし禪というて書いた人はなかつたな。今いうように、『武士の宗教』とか『生ける仏教』というような題で禪というものを書いた人はあつたが、禪そのものを表から書いたのは、自分でしような。

アメリカやヨーロッパから帰つて来てですね、学習院の先生と、それから帝国大学文学部（東京帝国大学文科大学）の英語の先生になつたわけですね。それにやまあ藤岡（作太郎）君などがありや世話したんだが。学習院における間は、別に何もやらなかつたかいな、ただ参禅しに鎌倉へしょつちゅう通つたと。もう汽車も出来ておるし、まあ設備も出来ておつたから、しょつちゅうちちらへ來たとね。そのほか、別に自分で禪のことを書いたことはないようと思うがな。もしあつたとすれば、いわゆるこの第一次世界戦争の時に、スコットという人がやり始めた雑誌の中へ何回かにわたつて執筆した。それが後年になつて出版になつて、『アン・イントルダクション・ツウ・ゼン・ブダイズム』という本になつて出たと。それから宗演老師が大正八年に遷化せられて、それで東京におつてもしようがなしと。それからまた学習院の中にちょっと問題が起こつて……。乃木（希典）さんの後に、何でも偉い軍人が院長になつた。その院長が亡くなられて、その次の院長の人と学習院との間に、まあ意見の衝突ぶつ突といふか……そのころ学習院の方に関係しておる宮内省の

役人たちが後ろにおったもんだろう……何か少し行き違いで、学校をやめてしまうということがあつたんだな。あの時、学校をやめてしまうと。それから宗演老師も亡くなられると。東京におつてもしようがないと、そういうことを考えておつた時に、大谷大学の方で、また何か大いにやろうという。……その佐々木月樵といいうあの人は偉い人でした、あれが早く死んだので困るが、あれが世話を、それから西田君などの世話で、大谷大学へ來た。そして大谷大学でも、まあ破天荒な金を、わしにくれたわけですね。大学としちゃあ、まあ大々奮発だな。そして、あの雑誌を出したわけですね、『イースタン・ブディスト』というのを出したと。それに毎号わしが何か書いた。そのころ英語で書く人はほとんどなしね。そしてやろうと思えば、人のを訳さにやならん。人のを訳すのはまどろこしくてしようがないから、まあ自分が書いたとなあ。それからというものが、禅の本が出来るようになつたんですね。

それからシナへ行つたのが……、そうだ、そうすりや大谷大学におつたころ、この、仏教者の人と一緒に行つたが、そいつはその、武藤山治かいな、ありや、武藤山治さんの世話をまあシナへ旅行したが、あの旅行がよっぽど面白いことは、あのころ有名な太虚といいう人があつて、蔣介石の信仰を受けておつたといいう、あの人のお寺へ行つたことがあつたな。雪竇といいう寧波の近辺で、あすこへ仏日の和尚だの聚光の和尚だのと一緒に行つたものだ、あの時は。もう一遍行つて見たいような気がするが……。あすこへ行つて太虛和尚に会つたりな。それからそのころ、何でもわしやあシナの僧堂をどうしても見ておかんちゅうといかんと思つとつたな。わしやそれからも到るところで、この、僧堂といいうか、僧院といいうか、モナステリーといいうか、アメリカやヨーロッパでも、そういうのを見つめて歩いたね。そこへ泊つたりして、僧堂の様子を見たかった。まあ唐時代の語録を見ても、禅宗の坊さんが、禪牀を……縄床じょうしゆうを下りて何とかかんとかといいうことがあるが、一体、実際はどういう具合にやつたもんかということを見たいと思うて、色々シナの僧堂を、

禅堂を見て歩いたですね。それから、そのころ浄土宗の有名な何とかいう坊さん（印光和尚）だが、その人が、ありや閉関ちゅうんだつたかな、何ていうかな、閉じこもつて、一箇年なら一箇年、人に会わんというのがあつたが、そういうことをやつておる浄土宗の坊さんでやかましいのがあつたですね。そしてその人が、人に会わんちゅうんだつたが、特別に日本から来たというので会つたことがあるな。一つの部屋の中にあつて、そしてその、郵便局か銀行の金を出し入れしたりする、ああいう口みたいなところを開けてですね、その窓から話しどつたんだが、その時、それに似合わない、その妙に思つたのは、その部屋に時計をかけてあつたな。その時計が、日本のこのダルマ時計というか、昔のこの振子のついた時計ですね、ああいうものをかけてあつたのを今でも覚えておるが……。その人と淨土の話をしたり、そのほか何を話したか、『支那紀行』（『支那仏教印象記』のこと）に書いてあるかも知れんが、忘れた。そういう人だの、それから上海や北京で仏教者に会つたりシナの学者に会つていろんな話をしたこと。そのころのシナは唯識といふものの研究が盛んだつたな。禅宗といふても、坐禅して、まあ日本でやるような禅堂の修行ということはなかつたようだつたね。それから、禅堂といふものも、あんまりきれいな禅堂じやなかつた。広いことは広かつたようだが、如何にも汚いような……。今行つて見たら違うかも知れんが、まあそういうようなことで、あの旅行は有益であつたと思うです。

それから、その次に、昭和十年ですかね、十一年かに、またロンドンへ出かけた。ロンドンへ出かけた時に、宗教……宗教といわぬで信仰会議として、信仰大会というような会を開いた時に、聘ばれてそこへ行つて、それからそのついでに……外務省で大学の先生の交換教授をやつておつたですが、誰も行き手がないから、わしにロンドンに行くならついでに……、その学校での講義を……講義っていうか講演を、せいというので、三、四箇所ありましたかな、ロンドンで講演をしたことがあるですね。その時も、勿論禅の講

義をしたが、禅と日本文化の関係ですね。それから、その帰りにアメリカでまた講演をしたというようなこと、そういうこともあるし……。実際この禅の本を書き始めたというのは、今からざあっと四十五年ほど前になりますね。まあ、四十年前後、英語の本を書いたということでしょうね。そしてそれを、ロンドンのイギリス仏教協会のクリスマス・ハンフリーーズという人が、戦争……第二の世界戦争の時に、わしの本をみなイギリスで出版したいというて、イギリスへ持つて行って出版をした。その時五、六種あったか、そいつがやっぱり禅を普及させるにあずかって力があったと思うが、どうだいありや……。あれがなかつたらだな、日本だけだつたら、わしの書いた本は、せいぜいで五百か千ですね、刷つたのが。ああいう本をその五百や千刷つたところで、世界へ行くわけはないな。

それからその、英語でそういうものを書き出したというそのもとはですね、アメリカへ行つておつて、老子の『道德経』を、ドクトル・オブ・ブッダ』を日本文に訳する時の心持とか、そういうものからですね、段々この、ことか、『ガスペル・オブ・ブッダ』を日本文に訳する時の心持とか、そういうものからですね、段々この、こういう考えが、感じが、わしに涌いて来たのは、「こりや、仏教のことを西洋の人は知らん」とね。そこで初めは禅のことではなくして、『アウトラインズ・オヴ・マハーヤーナ・ブディズム』と、いわゆる『大乗仏教概論』というものを英文で書いたと。それがはしりになって、まあ『大乗起信論』を訳したのも機会だけれども、まあ大体、それから今度はこの禅に移つたわけですね。仏教も何だが、仏教のことを書く人はいくらもあるし、それからパーゴラ語やサンスクリットをやる人もあるんだから、それよりも禅のことを書くのは、ほかに今までにないんだし、それからわしがまあいくらかそういう点について素養があるだろうと思つたから、それで書き始めたわけなんですね。殊にこの、アメリカに十年ほどおつたですね、それからヨーロッパを回つて一年ほど経つて帰つて來た、まあ十一、二年は外国におつて、そうして日本へ帰つ

て見るというと、今まで気のつかなかつたことに、日本でいくらでも出くわすですね。西洋の方と比べてみると、どうしても、西洋にいいところは、いくらもあると……いくらでもあって、日本はそいつを取り入れにやなんが、日本は日本として、或は東洋は東洋として、西洋に知らせなければやなんものがいくらもあると、殊にそれは哲学・宗教の方面だと、それをやらないかんというのが、今までのわしを動かした動機ですね。

ところが今度また、戦後、ハワイへ呼ばれて行つたと。そして今度が二回目だが、二度行つたわけだが……。この大戦争というのを、馬鹿な戦争をやつたので、何ともかんともいいわけがないだろうが、まあ歴史の段階から見りや、やむをえなかつたかも知れないが、それで、アメリカの人の東洋に関する関心というもの、イギリスはまあ昔からあつたが、アメリカ人の関心が、日本人へ来て見たり、日本人に接したり、日本のいろんなものを見て、そうして東洋に対する関心が高まつたということは、わしや確かだと思うですね。

で、そういうところへもつて来て、この今のホノルル・ハワイにおける会議が、哲学者会議だけれども、まあ宗教者会議だ……まあ宗教も中に入つておるわけだが……、そういうものが機縁になること。それから、ロックフェラーがだな、ハワイの会議が済んでから、つまり今から十一年ほど前（昭和二十五年）ですね、ロックフェラーの後援で、アメリカのまあ有名な大学の五、六箇所へ講演に回つたのですね。そうしてまあ今度この二、三年前、いよいよ日本へもう帰つて、いろんなことを調べてみたいと思うころになつてから、まあアメリカ東部の東海岸の各大学の方から時々……時々じゃない、あのころかなり頻繁に聘ばれたことがあるですね。そういうことと、それからこのイギリスやアメリカで講義をしたこの『禅と日本文化』といふ本がドイツ訳をせられ、それから『禅の序論（ディ・グロオセ・ベフライウンク——AINSHIULONKU・イン・デン・ゼンブツディスマス）』（『アン・イントルダクション・ツウ・ゼン・ブディズム』のドイツ語訳）

というようなのが、それがまたドイツ語になって、そして有名な心理学者のこのユングちゅう人が、それに序文みたいなものを書いたことがあるんですね。それから戦争中、フランスでみなわしの本をまあ訳したが、そういうものも関係しておるでしょうね。それから自然に出版の数が、今までのわずか五百や、せいぜいで千のものが、イギリスで出版しても、そう沢山は出版しなかつただろけれども、まあ各国語に訳されて盛んに読まれ出したと。それで益々禅が、ヨーロッパやアメリカの人の関心を引くようになつたんですね。

今はその機械の方と科学の方ですね、機械も科学も大いに結構だが、機械や科学にすると、この個人という……西洋では個人個人というけれども、その法律や政治上の方で個人といふものを重んじるが、宗教や信仰の方で、個人といふものに対する関心が、西洋の人は甚だ弱いな。それがこの、工業化とか機械化といふことになるといふと、また科学化ですね、そういうものになるといふと、人間がみんながみんな物に使われるといふことになるですね。それではこの自由な人間の創造性といふものは死んでしまう。もつともつと禅のことを書かなくちゃならんと思うです。それを書く人が少しずつ出て来るけれども、わしらの考え方からするといふと、どうしてあれじや誤解を招く機会が多からうと思ひますから、これから日本人、殊に日本人がやらなくちゃならないですね。それにや、またわしの議論があるけれども、まあ他日に譲るとしてですね。これから、日本語じや書けないから困るんだが、どうもしかたなけりや、まあいろんな善巧方便で、何度も西洋の言葉で書いてもよからうと思う。また西洋の言葉で書くといふと、禅を違った角度から見直すことができるといふこともある。今まで漢文や日本文で……日本文といふが漢文の癖があるのでから……、何だかそういうものでのみ見ておつた禅が、今度は西洋の思想や感情を背景にして、その上へ禅をのせる時にどうのせたらよいかということをやり始めなくちゃだめだと、それがまあ結論ですね。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

I

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 信仰と学問

今日は、信仰と学問と申しますか、或は宗教と科学と申しますか、或は信と智と云うようなことを申し上げたいと思うのです。

これを申し上げると云うようになった動機は、近頃、科学と云うものの進歩が余程急激になつて来て、單に理論の方面だけでなく、実際の方面においても、余程各方面に進歩をした。それがために、科学万能主義とでも思われるような心持に、我々始め皆なつて來たのであります。

で、そう云うことの中に、宗教と云うもの、信仰と云うものと、信仰と云うものと、同じようには取り扱いたいと思うのですが……、そう云うものがどう云う意味を持つものであるかと云うことを、一つ選んで考えてみたらどうかと思いついたので、それを今日大体にわたつて御参考までに申し上げたいと存じます。

そこで、信仰と云うものと学問と云うものとは、どう云う関係に立つてゐるのか、それを申し上げたいと云うことなんでございますが、それなら信仰と云うものはどう云うことであるかと申しますと、こう云ふうに申したいのです。信仰と申しますと、一番わかるのは、信仰と云うものと迷信と云うものを区別をし

て、それから知識と云うものとを比較をすると、よくわかると思います。信仰と云うと、普通に迷信と云うことと同じもののように感じられている向きがあります。例えば、迷信と云うことは、どう云う意味であるかと云うと……、真宗の方では、迷信と云うことが余程組織的に斥けられている。今日は何かいい日であるとか、明日は悪い日であるとか、どう云う所へ穴を掘ると、それは金神の祟りを受けるとか、その穴の深さが三尺以上であると、これは何か一種の祓いと云うものをやらなくてはいけないとか云うようなことを聞いたことがあります。私は京都の方ですが、名古屋地方では如何でござりますか知りませんが、私が庭の方に少し穴を掘りたいと思いましたら、百姓の人が、そこは三尺以上を掘ってはならぬ、それは金神の祟りを受けるから、先ずどうかしなければならぬと云うようなことを聞かされたので、大いにびっくりしたようなわけなんです。それから、家でも、こちらの方を開けるといいとか悪いとか、玄関から奥までを通り抜けにすると、ずっと福が逃げて行ってしまうとか、また、家のなかを余り明るくすると、どうも福が留まらぬと云うようなことを聞いております。で、そう云うようなのを、私どもは迷信と云っているのです。それはどう云う意味で迷信と云うかと申しますと、大抵、迷信と云うのは、現世の利益と云うことを主にしていることが多いようと思われます、こうすれば金が這入るとか、こうすれば長生きするとか。その長生きすると云うことも、養生をすれば長生きをすると云うようなことでなく、或る科学的の判定のつかないような事から、他の事を導き出そようと/or>。その間に、本当の因果関係の無いものに、因果関係のあるようにと云うふうにするのが、まあ迷信であると云うので、そう云うふうなのは「信」でない。信仰と云うのは、我々がこうして生きている、ただ生きている時の、その物質上の利害得失でなくして、それよりもっと深い、もっと大きなもの、即ち利害とか得失とか榮誉とか幸福とか云うものを感じないところに、一つの大きな信仰の礎を据えることが正しき信仰である、こう云いたいのです。もう一遍申しますと、我々は物質的な生活と精神的の

な生活をしていると、こう二つに分けて見たいと思う。実際は、二つに分けると云うことは、甚だ訳のわからぬことで、分けて見るのはいけないと私は思いますが、しかし、そう云うふうに仮りに分けてお話をするとわかりやすいから分けて云いますが、本当の信仰と云うことは、物質界の事に関しないで、精神界に一つ確かな立場を捨てることが信仰である。それから、迷信と云う方は、精神と云う方と物と云う方の関係を逆にして、そうして、物質の方に一つの論理の因果——科学の因果、物理の因果——に関係無きところの一つの信仰を有するのを、これを迷信と云いたい。それだから、迷信と云う方は、大抵は物質的の方面に関係しております、世間的な方面に關係している。そうして、世間的な方面に關係しておりながら、世間に行われている因果の法を無視した信仰の仕方である。それを迷信と云うので、世間的な事であれば、世間を支配しているところの因果の法則と云うものがあるから、その因果の法則に従うて信ずるなら、それは世間的の理解として、また一つの意義を持つていて、その因果を無視したところの無理な信仰、そうして世間的利益をそれから得ようとする、そいつを迷信と云いたいのである。本当の信仰と云うは、世間の因果と云う外に、もう一つ超世間・出世間的な方面に、因果を超えたところの一つの信仰、そいつを持つていてることを、本当の信仰、本当の宗教と云うのである。こう云うふうに見たいのです。

で、宗教と云うもの……信仰と申してもいい……、宗教的信仰と、こう云うふうに統けて云うてもよろしいが、この宗教的信仰と云うものは、世間の因果を離れて、世間の因果を超越して、そうして世間を立てているものは超世間なものだが、そこに土台をなしておつて世間が出来ていて、その世間を可能ならしめているところの、超世間の所に、因果を離れたと云う、因果を超越したと云う、一つの信仰が立てられると、それを宗教的信仰と云うが、それは迷信とよく間違えられることがある。その間違えられる点は、因果と云うことを超越していると云うところにある。迷信の方は世間に関したことで、そうして、世間の因果を無視し